

期日と忌日（一）

西をさむ

名月やたがみにせまる旅ごころ 去来

ここで問題です。此の句の中で「たがみ」とは、一体何でしょうか？ ふっと思い当たるのは、大抵、「田の神様」でしょう。でも少し変ですね。「田の神様」を「たがみ」とは不謹慎極まりない事です。では他の字を当て嵌めて見てはどうでしょう。例えば、「た」を手、田、他、多、侘、誰。「がみ」は「かみ」として、上、紙、髪、守など、これ等を組み合わせてみましょう。手上、手紙、そうか「手と紙」で手紙。これで解決かなって、いやいや待てよ。句の内容との整合性が不自然です。大体、「手紙」を「たがみ」と読むのは無理があります。次に田上、田紙、田髪、田守、う～ん、田代、田中、田端の様にここは田上ではないだろうか。これで、「たがみ」の意味が大体理解出来てきたと思います。

この句の作者は向井去来です。去来は長崎生まれで、実は幼少期に暮らしていた地名だったのです。これで全て解決しました。

「そうだ京都に行こう」なんて言う鉄道会社のコマーシャルが以前にありました。行くとしたら、秋の「今でしょ」。それも嵯峨野辺りはどうでしょうか。渡月橋から嵐山を背に天龍寺を抜けて大河山荘へ向かうと、嵐寛寿郎や大河内伝次郎に会えるかもしれません。トロッコ列車には乗らずに常寂光寺まで来ると、もう紅葉が始まっているでしょう。侘、寂、撓（しほり）の漂う落柿舎はもう直ぐです。

舎内に這入る前に畠越しに眺める落柿舎は、俳句を齧った事のある人には何かを予感させます。それはそうでしょう。あの松尾芭蕉が一度ならず二度三度も訪れているのですから。そうして最後に訪れてから四ヶ月足らずで、俳聖はこの世を後にして旅立って行ったのです。其の事を

見届けたのが向井去来でした。

去来は、長崎は田上に生まれて、幼少の頃のふる里の匂いもそこそこに、八歳で京に行くのでした。そうして又八年経った頃、養子縁組の話が舞い込み、仕官を夢見て福岡へと一人旅立つのでした。文武両道に励み武士たらんとして自分の代には家禄を上げようと必死でした。ところが、その家に十八歳も違う男の稚児が産まれたのです。決断をしなくては為りません。其処では恋の一つもしたであろう青年期を過ごし、家督の事情で京へと帰ってきたのでした。

一七〇四年、陰暦九月十日、芭蕉より三年ほどこの世に長くいて落柿舎を遺してくれました。

故郷も今はかり寝や渡り鳥 去来

放すかと問はるる家や冬ごもり 去来

柿落ちて猿も木登りしなくなり をさむ

こりゃ駄目だ、締め切りの期日が来た。